

第3学年B組 算数科学習指導案

授 業 者 伊藤 智美
研究協力者 加藤 慎一

1 単元名 円と球

2 子どもと単元

(1) 子どもについて

子どもたちにとって円や球は身近な形であり、今までの生活経験の中にも「まる」や「ボール」等として慣れ親しんできた図形である。子どもたちはこれまで「かたちあそび」の学習で、具体物を扱うことを通して形の特徴に目を向けて、ものの形を捉えられるようになってきた。円や球については、筒状の形や球形は転がりやすいことや、筒状の形を写し取るとまるい形になることなどに着目してきている。3年生になり、校内にある算数を見付ける活動では、長方形を見付け、一辺の長さを測ったり、三角定規を角に当て、直角かどうか調べたりしながら、「見付けた形は本当に長方形なのか」確かめる姿も見られた。また、算数の学習では、生活場面において、見付けた算数やそこから生まれた気付きや問いを全体で共有し、図形に関する見方・考え方を養ってきた。

一方で、友達の見方・考え方を受けて、自分の考えを再考したり、実際に反映させながら自分の考えを深めていこうとしたりする子どもは少ない。全体での学びを受けて、自分の学びを振り返り、新たな気付きを生んだり、自分の考えを深めたりしていけるような子どもになってほしい。

(2) 単元について

本単元では、円と球について、作業的・体験的な活動を通して定義や性質を発見していく。「どのようにしたら円をかくことができるのか」という問いを始めとして、円形の紙を折ったり直線をかいたりして、円の中心、半径、直径などの性質を調べるとともに、コンパスを用いて円を作図したり、長さを写し取ったりする作業的・体験的な活動を行う姿が見られるだろう。

一つの点から同じ長さになるように描かれた円には視覚的な美しさとともに、転がした時に滑らかに進んだり、向きを変えても直径の長さが変わらない特徴を生かしてマンホールの形に使われたりと機能的な特徴もある。時計や皿など、円は子どもたちの身近なところに多く存在し、扱いやすい形である。また、まるい形である楕円や扇形についても身近なところにあり、対比することで、半径の長さに着目し、円との違いに気付いていくことのできる形である。これらの形は、学習したことが生活体験に結び付きやすい教材である。いくつもの半径を調べたり、自分たちで見付けた様々な円を教材とし、いくつもの円について調べたりすることで、円の性質について、円の中心から周りまでの長さはどこも等しいというようなことを、帰納的に見いだしていくことになるだろう。

(3) 指導について

本単元では、**円と球の性質を見いだしたり構成のしかたを考えたりして、身の回りのものの形を円や球として捉え、生活や学習に活用する資質・能力を高めることを目指す。**

授業デザインの取組二つ目との関連から、課題解決の場面では、子どもたちに学びを委ねる時間を設ける。単元の導入において、学校の中や自分の身近な物の中から「まるい形」を探す場を設定することで、どんな特徴をもつ形がまるい形と言えるのか考え、「円」の概念を知ることができるようにする。そこから、「円をかくことができるのか。どうやってかくのだろう。」や「目の前にある形は円だと言えることができるのだろうか。確かめる方法はあるのかな。」等、子どもから生まれた問いを基に課題を立て、学習形態や解決方法を自ら選択しながら進めていく学びを保障していく。子どもたちはそれぞれ違う円を扱うだろう。様々な大きさの円に触れる機会を十分に設け、中心の位置や半径、直径の長さに焦点を当て調べるよう促すことで、よりの確に円の性質を帰納的に見いだしていくことができるようにする。

授業デザインの取組三つ目との関連から、一つの点から様々な長さに動くような仕掛けをしたまるい形を教室や黒板に提示し、課題解決の見通しをもったり、円の構成に目を向けて学びを共有したりすることができるようにしていく。また、友達との対話の中で、新たな気付きを生み出したり、自分の考えを深めたりすることができるように、単元を通して、獲得した新しい知識や方法などを用いて円や球の構成を問う問題や、身近な物を取り上げなぜそのような形をしているのか理由を考える問題作りをし、友達同士で出し合う場を設ける。

3 単元の目標〈記号は本校の資質・能力表による〉

- (1) 円とその中心、半径、直径について理解し、コンパスを用いて円を作図したり長さを写し取ったりすることができる。また、円に関連して、球についても理解することができる。〈B-5〉
- (2) 円の中心、半径、直径に着目し、構成のしかたを考えるとともに、図形の性質を見だし、身の回りのものの形を円や球として捉えることができる。〈B-1、B-2、B-8〉
- (3) 円や球に進んで関わり、数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理のよさに気付き、生活や学習に活用しようとする。〈イ・ウ〉

4 単元の構想（総時数9時間）

1年 かたちあそび 三角形や四角形、長方形、正方形、直角三角形について理解し、図形を構成する要素に着目して特徴を捉え、構成の仕方を身に付ける。

本単元

時間	学習活動 (・は予想される子どもの姿)	教師の主な支援	評価 (本校の資質・能力との関連)
1	(1) 身の回りにある形を探す。 ・ノート ・固定ロッカー ・時計 ・当番表 ・ボール	・子どもたちが、それぞれの形の構成要素に目を向けられるように、見付けた形とその形の特徴をノートに書くようにより促す。 ・形の特徴と結び付け、機能性に目を向けられるように、身の回りのものがどうしてその形をしているのか考える時間を設ける。	・身の回りの形に進んで関わり、観察することを通して、それらの性質を見いだしている。〈B-2〉
2	(2) 円をかくにはどうしたらよいか考える。 ・角がとがっていなければよい。 ・でこぼこしていない丸になるように線をかいていけばよい。	・円の意味や性質、円の中心、半径を理解できるように、工作用紙に等間隔に穴を開けた物を準備し、作図する場を設ける。 ・円ではないまるい形を提示し、次時において、見た目を対比することで円であることを確かめる方法を考える意欲を引き出す。	・円の意味や円には中心、半径があることを理解している。〈B-5、8〉
3 本 時	(3) 見付けた形が円かどうか確かめる。 ・半径を見付けて、長さを測ってみよう。 ・円を折ってみると、中心が見付かるね。 ・ボールは円と言うのかな。	・円の性質や構成を理解することができるように、身の回りで見付けた円を操作する活動を通して確かめる時間を設ける。	・円の特徴を捉え、円の中心と半径の関係を理解している。〈イ、B-2〉
4	(4) 直径について考える。 ・円をぴったり折って重ねた時に長さが等しい折り目ができる。 ・中心を通る直線が一番長い。	・直径や半径の関係に気付くことができるように、中心や半径、直径を円に書き込みながら操作活動を行う場を設定する。	・円の特徴を捉え、円の中心と半径、直径の関係を理解している。〈B-2〉
5	(5) 球について考える。 ・ボールは円ではないかな。 ・どこから見ても円に見える。 ・ラグビーボールも球かな。	・球の内部にある中心・半径・直径について理解がしやすくなるように、壁や扉に実際にボールを挟んで直径を測定する活動を取り入れる。	・球の意味、性質、球の中心、半径、直径を理解している。〈B-2〉
6 7	(6) コンパスの使い方や機能を知り、模様づくりをしたり、長さ比べをしたりする。 ・1ますずらしかくと、違った模様ができる。 ・コンパスは長さを写し取れるなんて便利だね。 ・ボールは円と言うのかな。	・コンパスの機能について理解を深めるために、2時で用いた画鋏や工作用紙、鉛筆と、コンパスの各部は同じ役割であることを確認する。	・コンパスの使い方を理解し、円の作図をしたり、機能を理解したりしている。〈B-5、8〉

8 9	(7) 学んだことを生かして問題作りをし、解き合う。 ・図から半径を求める問題を作ってみたい。 ・どちらが長いのか、コンパスを使って調べる問題を作ってみたい。	・自分の学習状況を振り返り、学習の定着を図るために、獲得した新しい知識や方法を用いて問題作りをする時間を設ける。	・円と球の見方・考え方を振り返っている。〈ウ〉
--------	---	--	---

◎本単元で育む主な資質・能力

円と球の性質を見いだしたり構成のしかたを考えたりして、身の回りのものの形を円や球として捉え、生活や学習に活用する。

(B1、2、5、8)



5年 正多角形と円

正多角形についての性質を円の性質と関連付けたり、正多角形について円の性質を利用して作図をしたりする。

5 本時の実際 (3/9)

(1) ねらい 円の中心や半径に着目し、見付けた円を写し取ったり、半径を測定したりする操作活動を通して、円の中心と半径の関係を理解することができる。 <イ、B-2>

(2) 展開

○自律的に学習を進めるための支援

時間	学習活動	教師の支援 評価
5分	① 学習の見通しをもつ。 ・でこぼこしていない丸だから円と言えらると思う。 ・半径を測ってみたら分かる。	・円の性質や構成に目を向けることができるように、自分の見付けてきた円はどうして円と言えるのか理由を考えながら確認するように促す。 ・前時で「まるい形」であるけれども円ではないと思った形を想起させ、どうすれば円だといえるのか調べたい意欲が高まるように具体的な形を提示する。
2分	② 本時のめあてを確認する。	
	めあて 円かどうかたしかめるには、どうしたらよいか。	
7分	③ 円を確かめる方法を考える。 (個→自然発生的なグループ) <予想される子どもの反応> 【中心を捉え、半径に目を向けている】 ・半径が同じ長さだったら円だ。 ・どこが中心だろう。中心が分からない。 ・半径は10cm。でも、もう一つの半径は9cmになった。 【見通しがもてない】 ・半径の長さが分からない。測ることができない。 【中心に目を向けている】 ・ぴったり重なるように折ってみると中心が見えた。 ・直線が重なるところが中心かな。	○前時の作図や操作活動を想起させ、円の定義や性質を振り返ることで、子どもが形を写したり、形を切ったり、長さを測定して考えたりといった、自分に合った方法を選び問題解決に向かうことができるようにする。 ○目的意識をもって友達との対話の中で考えを深めたり、相談しながら円であると確かめる方法に気付いたりすることができるように、学習形態に対する適切な声掛けをする。
15分	④ 全体で話し合う。 【半径だけに目を向けている】 ・長さを測ったけれど、どこも違う。自分が見付けたまるは円ではなかった。 ・中心の見付け方が分からなかった。 ・だいたいどの半径も6cmだから、これは円だと思っていた。けれど、中心が分からないと半径とは言えないな。 【中心を見付け、半径を測定して確かめている】 ・円がぴったり重なるように折って、中心から円の外側までの長さは全部8cmになった。これは円だ。	・半径の長さを測定することにだけ注目した子どもについて中心を求めることの必要性に気付くことができるように、中心を求めた子どもの考えを取り上げながら円の定義について確認していく。 ・円を折る操作を通して中心を見付ようとしている子どもの活動を取り上げる。何回も折ることで折り目の線が交わった点が円の中心であるかどうか確かめるために、その点から円の外側までの長さを実際に測定する時間を設ける。
8分	⑤ 本時の学習をまとめる。	○円を確かめるために必要なポイントを確認するために、中心や半径という言葉を用いてまとめている子どもを紹介し、価値付ける。 ・自分の円の中心を見付け、印を付け、そこから見付けた半径をかき込むよう促すことで、円であることを確認し、円の定義についての理解を深められるようにしていく。
	形の中心を調べ、円の線から中心までの長さが等しいかどうか調べる。	
	円の中心に着目し、円の中心と半径の関係を理解している。 <イ・B-2>(発言・ノート)	
8分	⑥ 学習を振り返る。	・仲間との対話を通して得た学びを試し直してみたいと思ったことや、他に見付けた円でも生かしてみたいと思ったことなどを全体で共有する時間を設ける。また、それらを用いて問題作りに取り組むよう促す。

令和7年度 算数科実践・研究計画

部 員	○伊藤智美、猿田千穂子、佐藤咲紀
-----	------------------

1 昨年度の成果と課題

昨年度の実践を通して、意欲をもって学習を進めたり、主体的に自分の問題解決方法を表現したりする姿が見えてきた。

① 4年「角の大きさ」では、身の回りにあるいろいろな角度を探す中で、他の人が気付いていないものを見付けようと、角度探索に没頭していた。自分で見付けた角度を分度器を用いて実際に測定していく中で、自分が測定した角度の外側も角度と言ってよいのか友達に相談したり、測定するにはどうしたらよいのか実際に手を動かしたりしながら、生活経験から見いだした問いを算数に結び付けようと奮闘していた。しかし、子どもの学びが教師を介して子どもに戻る場面が多くなり、再び個の学びを深めていく姿を十分に見ることができなかった。集団で学んだ事を受けて個の学びを見つめ直すための手立ての必要性を感じた。

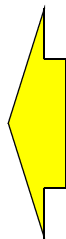
② 6年「比例と反比例」では、日常の中にある比例の場面を見付けたり、既習の学習を発展させるにはどうしたらよいかを考えたりした。興味・関心に沿って比例する2つの数量の関係について考えた。子どもたちは、身近な問題場面である水のかさ、画用紙、面積、速さ、長さなどについて場面を選択し、個々の学習計画に沿って問題を解きながら、既習事項に戻って考えたり、個やペア、グループで問題解決をしていったりする姿が見られた。

③ 2年「1を分けて～分けた大きさの表し方は?～」では、子どもたちが日常的に「半分」や「 $1/2$ 」という言葉を用いたり、折り紙を半分に折ったり、食べ物を人数分に分けたりする経験を、算数の学習と結び付けて考えた。1枚のチョコレートを1人分が同じになるように分け方を考える問題場面を作成し、九九を使って答えが12になる式を作ったり、チョコレートの紙を切って分けたりして、既習事項の活用や身近な具体物を操作する活動を通して課題解決をする姿が見られた。さらに、課題解決方法への理解を深めるために、自分の作成した問題を解決することが難しい子どもに対して、他の問題場面を通してそれを理解し、自分の課題解決につなげていく手立てがあるとよいと感じた。

こうした成果と課題を踏まえ、算数科部は、自律した学習者の姿を次のように捉える。また、自律した学習者が育つ授業デザインの具体的な取組を次のように設定する。

2 算数科における自律した学習者の姿

- ① 生活の中から生まれた問いや、既習事項を発展させた問いから、自分で課題を見だし、算数に結び付けて考える姿
- ② 自分で設定した課題に対して、自分に合った学習形態や解決方法を自ら選択しながら学び進める姿
- ③ 問題を解く過程や結果を表現し伝え合う数学的活動を通して、個と集団での学びをつなぎ、個の学びを深めていく姿



3 授業デザインの具体的な取組

- 個々の学びと協働的な学びに往還が生まれるような他者の学びを共有する場面を設ける。
- 課題解決の幅が広がるよう授業を展開し、子どもたちに学びを委ねる時間を確保する。
- 獲得した新しい知識や方法などを次の学習や生活の中で活用できるよう、見通しをもったり、学びを共有したりする場を導入に設ける。

令和7年度「算数科の資質・能力」表

※□は、資質・能力の取り扱い学年，■は、定着学年を示す。

内容			学習指導要 領との関連内 容	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
算数科の学びに 向かう力、 人間性等	ア	算数・数学的事実を自ら発見し、調べようとする。	全般	□	■	■	■	■	■
	イ	具体物や具体的な操作活動から、解決方法を見いだそうとする。	全般	□	■	■	■	■	■
	ウ	既習の知識をもとに、結び付けて考え、活用しようとする。	全般	□	■	■	■	■	■

算数科の各領域 の付けたい力 A 数と計算	1	ものともものとを対応させることによって個数を比べる。	A(3)①	■	■	■	■	■	■
	2	個数や順番を正しく数えたり表したりする。	A(3)①	■	■	■	■	■	■
	3	一つの数をほかの数の和や差としてみる。	A(3)①	□	□	□	■	■	■
	4	十進位取り記数法によって数を表す。	A(3)①		□	□	■	■	■
	5	十、百、千、万、億、兆などを単位としてみる。	A(3)①		□	□	■	■	■
	6	一つの数をほかの数の積としてみる。	A(3)①		□	□	■	■	■
	7	観点を決めて、整数を類別する。	A(3)①					■	■
	8	数の構成について考察する。	A(3)①					■	■
	9	数の相対的な大きさを考察する。	A(3)①		□	□	□	■	■
	10	目的に応じて概数で表す。	A(3)①				■	■	■
	11	ある大きさのものを等分したものを分数で表す。	A(3)①		■	■	■	■	■
	12	小数を1/10のいくつ分で表す。	A(3)①			■	■	■	■
	13	分数を単位分数のいくつ分かで表す。	A(3)①			■	■	■	■
	14	小数が十進位取り記数法によって表されていることを理解する。	A(3)①				■	■	■
	15	分数の大きさについて理解する。	A(3)①		□	■	■	■	■
	16	真分数、仮分数、帯分数について理解する。	A(3)①			□	■	■	■
	17	整数の除法の結果を分数で表す。	A(3)①					■	■
	18	分数を小数で表す。	A(3)①					■	■
	19	加法について計算の意味と計算の仕方を考える。	A(3)②	□	□	□	■	■	■

	20	加法の意味を理解する。	A(3)②	☐	☐	☐	☒	☒	☒
	21	加法の計算をする。	A(3)②	☐	☐	☐	☒	☒	☒
	22	減法について計算の意味と計算の仕方を考える。	A(3)②	☐	☐	☐	☒	☒	☒
	23	減法の意味を理解する。	A(3)②	☐	☐	☐	☒	☒	☒
	24	減法の計算をする。	A(3)②	☐	☐	☐	☒	☒	☒
	25	乗法について計算の意味と計算の仕方を考える。	A(3)②		☐	☐	☐	☐	☒
	26	乗法の意味を理解する。	A(3)②		☐	☐	☐	☐	☒
	27	乗法の計算をする。	A(3)②		☐	☐	☐	☐	☒
	28	除法について計算の意味と計算の仕方を考える。	A(3)②			☐	☐	☐	☒
	29	除法の意味を理解する。	A(3)②			☐	☐	☐	☒
	30	除法の計算をする。	A(3)②			☐	☐	☐	☒
	31	四則の混合した式を計算する。	A(3)②				☐	☐	☒
	32	既習の知識を利用して、いろいろな方法で計算結果の確かめをする。	A(3)②	☐	☐	☐	☐	☐	☒
	33	様々な事象の中から法則性を見だし、交換法則・結合法則・分配法則などを場合に応じて活用する。	A(3)②			☐	☒	☒	☒
	34	数量の関係に着目し、加法及び減法が用いられる場面を式に表したり式を読み取ったりする。	A(3)③	☐	☐	☐	☒	☒	☒
	35	数量の関係に着目し、乗法が用いられる場面を式に表したり式を読み取ったりする。	A(3)③		☐	☐	☐	☐	☒
	36	数量の関係に着目し、除法が用いられる場面を式に表したり式を読み取ったりする。	A(3)③			☐	☐	☐	☒
	37	数量の関係に着目し、数量の関係を文字を用いて表現したり、式の意味を読み取ったりする。	A(3)③			☐	☐	☐	☒
	38	数を日常生活の場面に応じて活用する。	A(3)④	☐	☐	☐	☐	☐	☒
	39	四則計算を日常生活の場面に応じて活用する。	A(3)④	☐	☐	☐	☐	☐	☒
	40	概数や四則計算の見積もりを日常生活の場面に応じて活用する。	A(3)④				☐	☐	☒
	41	既習を適用する。	A(3)①～④	☒	☒	☒	☒	☒	☒
算数科の各領域 の付けたい力 B 図形	1	形の特徴をとらえて、ものを弁別する。	B(3)①	☒	☒	☒	☒	☒	☒
	2	図形の構成要素をもとに、図形の性質について考察し分類する。	B(3)①		☐	☐	☐	☒	☒
	3	図形の構成要素の関係をもとに、図形の性質について考察し分類する。	B(3)①				☐	☐	☒
	4	角の数量的な関係をとらえる。	B(3)①				☐	☒	☒

	5	道具を用いて、図形を構成したり、作図したりする。	B(3)②	☐	☐	☐	☐	☐	☒
	6	図形間の関係をもとに、図形の構成の仕方をとらえる。	B(3)②				☐	☐	☒
	7	立体図形を見取り図や展開図で表したり、見取り図や展開図をもとに、立体図形を構成したりする。	B(3)②				☐	☒	☒
	8	図形のもつ美しさに気付く。	B(3)②	☐	☐	☐	☒	☒	☒
	9	図形の性質を生かしてデザインする。	B(3)④		☐	☐	☐	☐	☒
	10	図形の構成要素の大きさを数値化する。	B(3)③				☐	☐	☒
	11	面積や体積の求め方を考え、計算によって求める。	B(3)③				☐	☐	☒
	12	図形のもつ機能的な側面を日常生活の場面に応じて活用する。	B(3)④	☐	☐	☐	☐	☐	☒
	13	図形の性質を活用し、測量を行う。	B(3)④			☐	☐	☐	☒
	14	平面や空間における位置を特定し、表現する。	B(3)④	☐	☐	☐	☐	☐	☒
	15	既習を適用する。	B(3)①～④	☒	☒	☒	☒	☒	☒
算数科の各領域 の付けたい力 C 測定	1	直接比較や間接比較により、量の大小判断をする。	C(3)①	☐	☒	☒	☒	☒	☒
	2	任意単位を用いて、量を数値に置き換えて比較する。	C(3)①	☐	☐	☒	☒	☒	☒
	3	ある量を基準として別の量の大きさを表す。	C(3)①	☐	☐	☐	☐	☒	☒
	4	測る物に応じて適切な計器を用い、正確に測定する。	C(3)②		☐	☐	☒	☒	☒
	5	適切な単位を用いて、量を表したり、比較したりする。	C(3)②		☐	☐	☐	☒	☒
	6	量の分割や移動による保存性や普遍性に気付く。	C(3)②		☐	☐	☐	☒	☒
	7	日常生活の中で時刻を読む。	C(3)②	☒	☒	☒	☒	☒	☒
	8	時間の単位(日、時、分、秒)とそれらの関係をとらえる。	C(3)②	☐	☐	☒	☒	☒	☒
	9	時刻や時間の計算をする。	C(3)②	☐	☐	☒	☒	☒	☒
	10	長さ、重さ、かさの単位間の関係を統合的にとらえる。	C(3)③	☐	☐	☒	☒	☒	☒
	11	量の大きさの見当をつけ、それを実際の場面で活用する。	C(3)④		☐	☐	☐	☒	☒
	12	量や計器を目的に応じて適切に選ぶよさに気付き、進んで生活に活用する。	C(3)④		☐	☐	☐	☒	☒
	13	伴って変わる二つの数量の関係を表や式、グラフを用いて表現する。	C(3)①				☐	☐	☒
	14	伴って変わる二つの数量の変化や対応の特徴を見いだす。	C(3)①				☐	☐	☒
	15	二つの数量の関係と別の二つの数量との関係を割合を用いて比べる。	C(3)②				☐	☐	☒

	16	割合や比を用いて数量の関係を比べたり, 知りたい数量の大きさを求めたりする。	C(3)②				☐	☐	☒
	17	伴って変わる2つの数量の変化や対応の特徴を考察し, 見いだした規則性などを日常生活の場面に応じて活用する。	C(3)③				☐	☐	☒
	18	既習を適用する。	C(3)①～④	☒	☒	☒	☒	☒	☒
算数科の各領域 の付けたい力 D データの活用	1	統計的に解決可能な問題を設定する。	D(3)①				☐	☐	☒
	2	目的に応じてデータの集め方を考え, データを集める。	D(3)①				☐	☒	☒
	3	データを分類整理し, 特徴をとらえる。	D(3)①	☐	☐	☐	☒	☒	☒
	4	目的やデータの種類に応じて表やグラフに表す。	D(3)①		☐	☐	☐	☐	☒
	5	表やグラフから見いだした特徴や傾向から問題に対する結論をまとめて表現したり, さらなる課題や改善点を見いだしたりする。	D(3)①					☐	☒
	6	代表値の求め方や意味を理解し, 適切に用いる。	D(3)①					☐	☒
	7	事象の起こりやすさについて考察する。	D(3)①		☐	☐	☐	☐	☒
	8	起こり得る場合について落ちや重なりがないように調べる。	D(3)①						☒
	9	結論について多面的・批判的に考察する。	D(3)②				☐	☐	☒
	10	既習を適用する。	D(3)①②	☒	☒	☒	☒	☒	☒

〈算数科の学びを支える「見方・考え方」〉

- a 事象を数量や図形およびそれらの関係などに着目してとらえ, 基礎的・基本的な概念や性質などを理解しそれらを用いて説明する。
- b 事象を数量や図形およびそれらの関係などに着目してとらえ, 具体的な操作活動をもとに説明する。
- c 事象を数量や図形およびそれらの関係などに着目してとらえ, 数学的な表現を用いて説明する。
- d 事象を数量や図形およびそれらの関係などに着目してとらえ, 筋道を立てて論理的に説明する。

〈領域の学びを深める「見方・考え方」〉

- 数 と 計 算 e 数の表し方の仕組み, 数量の関係や問題場面の数量の関係などに着目してとらえ, 根拠をもとに筋道を立てて考えたり, 統合的・発展的に考えたりすること。
- 図 形 f 図形を構成する要素、それらの位置関係や図形間の関係などに着目してとらえ, 根拠をもとに筋道を立てて考えたり, 統合的・発展的に考えたりすること。
- 測 定 g 身の回りにあるものの特徴などに着目してとらえ, 根拠をもとに筋道を立てて考えたり, 統合的・発展的に考えたりすること。
- データの活用 h 日常生活の問題解決のために, データの特徴や傾向などに着目してとらえ, 根拠をもとに筋道を立てて考えたり, 統合的・発展的に考えたりすること。